
恋愛ゲーム

荒月 陸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛ゲーム

【Nコード】

N4392T

【作者名】

荒月 陸

【あらすじ】

『ローザ・パティール』

そこは、乙女達が夢をみる場所

そこは、乙女が恋をする場所

様々な夢をもつ乙女達は、様々な世界を歩く

最後に彼女達を選ぶのは、誰か：

夢を見る場所……『ローザ・パティール』……（前書き）

当小説は、名前の通り恋愛ゲーム・乙女系ゲームを題材にしたものです。

そのようなゲームを好む方の中には嫌悪感を抱くことがあると思いますが、全て自己責任、でお願いします。

夢を見る場所……『ローザ・パティール』……

乙女達は、夢を見る。

乙女達の夢は、甘く美しく、そして極上の香りを醸し出す。

緑に囲まれ、静かな雰囲気醸し出すどこにでもありそうなカフェ
：『ローザ・パティール』。

そこは、乙女達が夢を見て恋を楽しむ場所。

乙女達は、自分好みの男に囲まれてその可愛らしい顔に歓喜を含ま
せる。

乙女達は、極上の夢を作り上げる。

乙女達は、夢を見る。

乙女達の夢は、甘く美しく、そして極上の香りを醸し出す。

スイーツよりも甘くて美味しい、乙女達の夢。

また、夢を運ぶ乙女が、やってきた。

夢を見る場所……『ローザ・パティール』……（後書き）

は、初の投稿です…なんという緊張感。

どういうことやねん、という方のためにこの小説のを役に立つのかどうかはわからないQ&Aをば。
どうでもいいわ！そんなん！という方は読まなくても今後の物語には支障ないのであしからず。

Q、どんな小説？

A、乙女系ゲームを斜めに見すぎた小説です。気分を害された！と訴えられましても責任は取りかねます。自己責任で。

Q、主人公はどんな子？

A、ケースによって変わります。皆夢見る女の子ですが大体中高生をイメージしています。

Q、でてくる男の子はイケメン？

A、イケメンです。フツメンもいますけど。

Q、ハッピーエンド？

A、TPO。

Q、ぐろい？

A、偶に。

そんな感じで。まだ気になることや質問がありましたらどんどんどうぞ！

佐藤 さくら様 ご来店です。

「いらっしゃいませ。お嬢様。」

「は、はいっ！」

「当店には初めてのご来店ですね。では、こちらへどうぞ。」

「はい！」

はわあああ！本物の執事さんだ！いや、厳密には本物じゃないんだけどね！ただの店員さんなんだけども！それでも、そういう衣装を見るとなんかキューン！ってするよねえ。

「お嬢様、お待たせいたしました。こちらに。」

「ひゃ！わ、はいいい！」

「ふふ。ご案内しますね。どうぞ。」

執事風のお兄さんがにつこり笑って私の、私の手を取った！イケメンは正義ですよねっ！お兄さん！！

私がこのお店、『ローザ・パティール』を知ったのは友人からの情報である。何を隠そう、私の友人はプロの（コスプレイヤーにプロなんてあるのかどうかなんて知らないけど…）コスプレイヤーなのである！！

そんなプロの彼女が絶賛するコスプレ喫茶『ローザ・パティール』！通称『ローザ』！

なんでも、『ローザ』は一粒で二度美味しいらしい。お出迎えはイケメンな執事！中で接客してくれるのは自分の願望に沿ったコスプレ・キャラクターを演じる店員さんがひとりひとりについて接客してくれるらしい！友人はそんな『ローザ』の虜になってしまった

らしく、もう週4だか5だかで通うレベルらしい。

私はそんな友人にホイホイ釣られて今日、来てしまったのだ！その『ローザ』に！

外観はアキバとかにある雑居ビルとかじゃなくって、落ち着いた雰囲気のおしゃれなカフェ。どうみてもコスプレ喫茶、って雰囲気ではない。一般人とか間違って入っちゃいそう。それくらいに普通。…まあ、ちよつと都会からの距離はあるけどね…ここまで来るのに電車で1時間ちよつとは揺られなければいけない。私の友はこんな長い道のりを週に何回も通っているのか！なんという執念だ！

通されたお部屋は白い壁の素朴なところ。

そして、個室である。個室である。大事なことで二度言ってみた。

この個室で人目を気にせずイケメンの店員さん達と思う存分イチヤイチヤしろというわけですね。分かります。

「それで、今回はわが『ローザ・パーティー』にどのような夢物語をご所望ですか？」

「あ、えつとですねえ。」

カバンの中から取り出すは我が妄想の宝庫！某リラックスしたクマの手帳である！ふふふ、この手帳には私が日々妄想して萌え萌えするためのエピソードが綴られているのだ！

その中の1ページ、私がこのお店にお願いする夢がつまっている。

「あった！…えつと、ずばり言いますと…私が望むのはすばらしい！学園生活ですね！」

「すばらしい、学園生活、？」

そのきよとん顔が可愛らしいです、お兄さん…じゃなかった。

「そうです。イケメン達に囲まれてちやほやされて、乙女にとっては本当に夢のような生活ですよ！それって！」

「そうなのですか。では、例えばどのようなキャラクターが？」

「そうですねえ…ツンデレで俺様な生徒会長とか、ドS風紀委員長とか、人懐っこい後輩とか、ですかね！」

「なるほど、では、そのようにオーダーしてきますね。」

お兄さんはにっこり笑って席を立つ。うゝ…楽しみだなあ！

「って、あれ？」

さっきまでお兄さんの座っていた席には真っ白な携帯。お兄さんの落し物かな？

「おにいさ、じゃなくて、店員さん！おと、し…も………」

佐藤 さくら様 ご来店です。 (後書き)

最初の夢見る乙女、佐藤さくら様のご来店です。

さて、彼女の夢はどんな味がするのでしょうかね。

たのしみですね。

ーレ オーナー

ローザ・パティ

佐藤 さくら様 ご説明です。

「う、ん……。」

6時10分。あーあー、なんでこんな時間に目が覚めるんだか。まだまだ学校に行くまでに時間あるじゃん。寝れるじゃん。

「つて、ん？」

時間を確認した携帯電話。：これ、私のじゃないよ！

え？えええ？誰？！誰の？！

っていうか、私『ローザ』にいたはずじゃん！！ここ自分の部屋じゃん？！なに、夢オチ？！ベタだろ！ベタだよおお？！

：いや、まて。ならこれ誰の携帯？私んじゃない。あのお兄さんの…あれ？

だめだ混乱してきた。あれ？あれは夢？じゃあこの携帯なに？あれ？と、おもってたら突然のバイブレーション。もしかしたらあのお兄さんかも！これは謝らなければ…。勝手に持ってきましたすみませんって。

『おはようございます。お嬢様。』

「あ、えっと、おはようございます？」

『はい。おはようございます。』

電話の主はあのお兄さんではない。声が違う。この声の主はエロやか（エロくてさわやか）だ。
じゃあ、だれ？

『私^{わたくし}、ローザ・パティエーレのオーナーであるアレックス、と申します。今回は当カフェをご利用いただき有難うございます。』

「え？！オーナーさん？！」

『はい。オーナーでございます。アレックスと及びください。お嬢様。』

「はあ、じゃなくてすねえ！私、アレックスさんのところの従業員さんの持ち物を持ち出してしまったみたいで」

『なんの問題もございません。それは差し上げたものですので。』

「差し上げたって…。」

一体、何を言っているのか：私には理解不能です！

朝っぱらから持ってきてしまった携帯に電話はかかってくるわ、その相手が『ローザ』のオーナーさんのアレックスさんとやらだわ、この携帯は私にくれたとか！

ああ、もうちょっと国語の勉強をしておくんだった！

『それでは、この世界についてご説明させていただきます。』

「は？」

『この世界は、私^{わたくし}の作り上げたお嬢様の暮らす世界とは異なる世界です。ここではお嬢様の』

「ちょ、ちょっと待ってください！い、異世界ってことですか？！」

『はい。そうですよ。』

「信じられない…。」

アレックスさんのくすくす笑う声が聞こえる。

いや、こっちが笑いたい気分だよ！異世界とか、絶対嘘だ！

『信じなくても、いずれは分かることです。それでは説明の続きをさせていただきますね。』

「未来永劫理解できません。」

『ここはお嬢様のご要望通りの世界になっております。素敵な学園生活、とやらの。』

素敵な学園生活：それは確か私が『ローザ』でお願いした内容。：それが、この異世界（仮）に？なにそれ俺得でしかないじゃないか。

『^{わたくし}私の力で集めましたお嬢様好みの男性を取り揃えました。その人数は7人になります。けれど…。』

『お嬢様には最終的には1人だけ、しか選べません。』

「と、いうと？」

『皆に愛されることは可能です。けれどエンディングはそういうものでしょう？1人だけに愛され、愛する。素敵でしょう？』

「…まあ。」

『そういうことです。この携帯はいつでも私に^{わたくし}繋がります。何かあれば、こちらに。』

アレックスさんからの通話は切れた。もうあのエロやかボイスは聞こえない。

うーん…これは夢？悪戯？

いまいるこの世界が異世界と確証できるものもないし…だって、ここ私の部屋なんだもん。うーん…。

しょうがない。二度寝するか。

佐藤 さくら様 ご説明です。 (後書き)

いってらっしゃいませ。お嬢様。

良い夢を。

アレックス

ローザ・パーティーレオーナー

佐藤 さくら様 オープニングその1です。

「さくら…こら、さくら。そろそろ起きなさい！遅刻するわよ！」

「んー…お母さん。あと、5時間…。」

「ベタなこと言ってんじゃないわよ。ほら、霧人^{きりと}くんもお迎え来てるのよ！」

「きり、と…。」

誰やねん。

いつも通りにハンガーにかけてあった制服はいつものセーラー服じゃなくてやけにアニメチックなブレザーの制服だった。わー私ずっとセーラーだったからブレザーって憧れてたんだよねー…じゃねーし。私のセーラーどこいった。

アレックスさんの仕業か…そういうことにしておこう。

それにしても、だが霧人君とやらは誰なんだろうか…アレックスさんが言ってたイケメンの事か。

「お母さん、おはよー。」

「おはよう。早くご飯食べちゃいな。」

「うん。」

いつもの食卓に座ろう…としたら、私の席の目の前に知らないイケメンが居る。

「えっと…。」

「おはよう、さくら。寝ぐせついてるよ。」

「ああ、どうも。」

現実にはありえない紫色髪。でも不自然じゃないなのは、この人がイケメンだから、か…ゴクリ。

そのイケメンは私の寝ぐせがついているらしい髪を撫でている。なんという気持ちよさ…。

「さくら、寝ちゃ駄目だ。今日から一緒に学校行くんだからしっかりしてくれよー。」

「あう…はいい…。」

「飯、食って。寝ぐせは直してあげるから。」

イケメンまじイケメン…。

「あらあら、さくらだったらまた霧人君に甘えちゃって。もう高2なんだからそろそろ引退しなさいよ。」

ちよっ、母さんちよつと黙れ。

「はあ、もう暖かいね。」

「ですね。」

「はは。なに、緊張してるのか？さくららしくないな。」

「えーつと…。」

イケメンとお話できるのはとっても嬉しいのだよ。けどね、なんかね、あっちは一方的に知ってる、って感じがね、なんかむずがゆい

というか…。多分、この人が霧人君で間違いないのは分かるけど…、私にはこんなイケメンな幼馴染はいない。むしろ、幼馴染なんて呼べる子なんていない気が…。あ、寂しい奴って思った奴は放課後校舎裏な。

にしても、霧人君は本当に綺麗な顔をしている。ちょっと長めの紫色の髪とか、同じ色の瞳とか、年上らしい優しい微笑みとか…。さりげに私に合わせてくれる歩幅とか…。これは顔と関係ないか。お兄さん系ってやつですね分かります。乙女ゲーには大体いますよね、そういうキャラクター。

「さくら？ ホントに緊張してるわけ？ …大丈夫。今年からは俺もついているんだから、心配ないよ。ほら、さくらの笑顔を俺に見せて？」
「うーん…。」

イケメンってなんでこんなにナチュラルに恥ずかしい事言えるんだろ。もう、私恐い。

「さくら、霧人。なにしてんの。」

「!!」

「ん？ ああ、篠実しのみか。」

霧人君とは違ったちよつと掠れたイケメンボイス。略してイケボ。振り向くとそこにいたのは…。

「? ……おはよ。」

ただのイケメンだった。

「おはよう、篠実。お前も今から登校って、ことは…?」

「うん。完全遅刻だよ。自分は別にいいけど、さくらは意気込んで皆勤賞お〜とか言ってたっけ。」

おいまてお前何故それを知ってくあ z w s e d c f r t g b y ふじこ
l p 。 ; @

私の小学校時代の黒歴史じゃないか！次の日におたふく風邪で休んで夢は潰えたがな！

「それはやばい…さくら、篠実、走るぞ！」

「ええ?!いきなりっすか?!」

「自分は歩いていく。」

「馬鹿、俺今日から教育実習生！先生と変わらないんだからな！」

「……もう霧人面倒臭い。」

ボソッと呟いたけどね、篠実君とやら、私には聞こえているぞ…。

とにもかくにも、私は走って学校に向かった。朝からハードな運動はよしてくれよ…。

佐藤 さくら様 オープニングその1です。(後書き)

《キャラクタープロフィール》

笥 霧人

かけい きりと

年齢…24歳

役職…ローザ学園高等部OB 教育実習生

キャラクタータイプ…お兄さん 温和

イメージカラー…紫

井原 篠実

いはら しのみ

年齢…17歳

役職…ローザ学園高等部2年 軽音楽部

キャラクタータイプ…大人しい 幼馴染

イメージカラー…鶯色

佐藤 さくら様 オープニングその2です。

「ハア…ハア…ふぁ…。」

変態じゃないよ。例え変態だとしても変態という名のry

「さくら、体力なさすぎ。」

「う、うるせえやい。」

篠実君はちよつと乱れた金髪を整えながら涼しげに言う。

篠実君は毒舌キャラか！なんということだ！結婚してくれ！

と、まあなんだかんだで学校にきました。名前は『ローザ学園』
というらしい。

「じゃあ、俺はちよつと大学寄ってから行くわ。篠実、さくら頼むぞ。」

「は？なにそれ私は子供じゃないぞ。」

「任せといて。さくら、行こ。」

「あ、うん。って篠実君、君って奴は何気に霧人君の肩を持ったらう！」

敷地内に入ってから大学行くって…大学も併用か！この学校は！エスカレーター式って奴だな？！

あ、というか篠実君に手握られてるよ…。照れるなあ…。

暫く歩いていると高校の校舎らしき物が見えてきた。
人だかりいっぱい。

「げ。風紀委員だ。」

「えっ！風紀委員？」

なんだ、その美味しそうな役職は。ぜひドSでクールなキャラでお願いします。

「今日ネクタイ持ってきてないんだけど…。」

「あらら。残念無念またらいしゅー。」

「そう言ってるけど、さくらも学章ついてないからね。」

「え。」

篠実君に人差し指でつつかれたブレザーの襟部分には何もついていない。多分ここに学章が付いている筈なのだろう…。ちょ、もうあーあオワタ！

「おい、その生徒。」

低音ボイス。これは…某シキティを彷彿とさせるような…。

「ネクタイと学章。」

「持ってきてません。」

「私もです…。」

ブルーな髪の毛のイケメン。腕には風紀委員の腕章。見事に切れ長な目で眉間に刻まれた皺がドSな空気を醸しだしております…。と
いうかオーラがラスボス臭がします本当にありがたいとございます。

ドS好きの血が騒ぐぜ。

「今日は服装検査があるとあらかじめ連絡しておいたはずだが？」

「忘れてました。」

「ちょ、篠実君…。」

そんなはつきり言っているのかよ…篠実君、超男前というか恐いもの知らずというか…。

「はあ…お前ら、今日放課後生徒会室に来い。いいな。」

「え〜。」

「いや、行きます！行きます！！」

篠実君マジTPO考えれてないSKY（スーパー空気読めない）。

「篠実君、ああいうの止めたほうがいいぜ…いずれ命をおと」

「さないよ。どこの戦国時代？さくらちよっと夢から覚めたほうがいいよ。」

「毒舌反対！」

篠実君なんか毒舌に磨きがかかっています。この数分になにが…。

篠実君の毒舌に気を取られていると袖をクイ、と軽く引かれた。おつとなんだいなんだい。

「あ、あの…1-Aの教室に行きたいんですがどう行けばいいです

か？」

か、可愛い！！

なんだ。この小動物を匂わせる大きな瞳に私より少し小さいくるくる巻き毛の男子は！！栗色の頭に顔をうずめてナデナデしたい衝動に駆られそうだ！

「その階段三階に上がってすぐの渡り廊下渡って左。」

「あ、ありがとうございます！」

「ん。いいからさっさと行って。HR始まるから。」

「はい！ありがとうございます！」

篠実君め…私のあの可愛い子ちゃんとの会話を潰したな…。ん？おやおや。誰か生徒手帳落としていつとるがな。

「どれ。河本、武留…（こうもと たける）あ、さっきの子じゃん。」

「本当だ…。あれ、ドジすぎない？1年にしたってもう入学式から1週間は経ってるけど。」

「そんなところが可愛いんじゃないか！篠実ちゃんったら分かってないねえ。」

「ちゃん付けとか。さくらムカつく。」

篠実ちゃん超毒舌！！

佐藤 さくら様 オープニングその2です。 (後書き)

《キャラクタープロフィール》

向島 勇斗

むこうじま ゆうと

年齢…18歳

役職…ローザ学園高等部3年 風紀委員長

キャラクタータイプ…DS クーデレ

イメージカラー…青

河本 武留

こうもと たける

年齢…16歳

役職…ローザ学園高等部1年 サッカー部

キャラクタータイプ…敬語 ドジ

イメージカラー…緑

佐藤 さくら様 オープニングその3です。

ところ変わって教室である。教室超広い。さてはこの学校金持ち学校だな。

席は窓際一番後ろ。篠実君は3つ横の前から2番目。可愛いそうに。先生にガン見される席じゃないか。

「じゃあお前ら予告通り転入生紹介するぞー。」

なにそれ。聞いてないぞ。ハゲ（担任はハゲ頭の中年である。NO Tイケメン。遺憾の意。）。

女子キヤーキヤー言うな。男子吠えるな。篠実君は…もうちょっと興味を示そうか。寝ちゃダメ！

「じゃあ入ってきなさい。」

ガラリ なんて効果音。ありきたり。

暢気にそんなことを考えていると女子の黄色い声。ちょっとびびった。

「大阪から来た松原君だ。少し皆との合流は遅れたが、仲良くするように！」

微笑を浮かべた長身のイケメン。茶色…というよりオレンジだな。オレンジの髪の毛のちよっとチャラ男みたいな風貌。でも、顔はカッコいい。

「松原^{まつばら}亮^{りょう}います。よろしゅうしたってください！」
『キヤー！！』

女子の黄色い声。あー、耳キンキンする。篠実君は相変わらずお眠り中。

「じゃあ、席は佐藤の横だな！」

「えっ…。」

『ええー！！』

なんだ。文句あるのか。だが、私も意外に思っていますよ。私の隣の席は確かに空いているけど…休みなんだと思ってた。転入生のためのものか…。

「松原亮っていうんよ。よろしゅうね。佐藤さん。」

「へ、ああ、うん。よろしく。佐藤さくらです。」

「うん。よろしゅう、さくらちゃん。」

松原君のさわやかスマイル攻撃！私の心臓はドキリと跳ねた！前髪を止めているカラフルヘアピンが良くお似合いです…。あれ、篠実君が不機嫌そうにこつちを睨んでいる。はいはい。真面目にHRを受けますよ。

「ねーねー、さくらちゃん。昼休み、校内案内してもらってもええかな？」

「えっ？えっとー、」

実はというと、私はこの学校の構造など知らない。だって、私が通

っていた元の学校はもつと狭かったし…。

「ダメ。さくらは自分と一緒に昼食とるから。」

「わ!」

「あ、篠実君。」

いつの間にか篠実君が私の席の近くにいた。雰囲気なんかどろどろしている。お、怒ってるの…かな?

そんな篠実君に臆する事無く松原君はニコニコしている。

「じゃあ、さくらちゃんがご飯食べ終わってから、でええやん?」

「ダメ。」

「なんや自分、ケチンぼやなあ。ケチンぼ君はさくらちゃんのなんなん? 彼氏?」

「は?!」

「…………。」

かかかかか彼氏な訳ないじゃん! 私みたいなのに彼氏になつてくれるわけないじゃん! まだ出会ってちょっとしか経ってないけどあの篠実君だぜ?! 「なんで自分がさくらの彼氏にならないといけないの? 馬鹿なの?」とか普通に言っちゃうタイプだと思うよ!

「そうだ、って言ったらどうするわけ?」

「は?! 篠実君何言ってるの?!」

「んー…略奪愛、って燃えるやん?」

「ま、松原君まで…。」

なんだ。この二人、頭可笑しいのか…？ 私なんぞを取り合って何が楽しいのやら…

佐藤 さくら様 オープニングその3です。 (後書き)

《キャラクタープロフィール》

松原 亮

まつばら りょう

年齢…17歳

役職…ローザ学園高等部2年(転入生)

テニス部

キャラクタータイプ…ムードメイカー

関西弁

イメージカラー…オレンジ

佐藤 さくら様 オープニングその4です。

結局昼休みは篠実君と松原君の校内案内をしました。まあ、ほとんど篠実君がしてたんだけどね！篠実君マジ頼りになる。

そして現在、放課後です。青い風紀委員さんに生徒会室に呼ばれているのでちゃんと行きますよ。篠実君もちゃんと捕まえています。どんとこいです。

「ねえ、やっぱり帰ろう。」

「おいおいおい。生徒会室は目と鼻の先だぜ？篠実さんよ。」

「どうせ行っちゃってちよつとした注意だけだよ。生徒会長までいたら面倒だし。」

「生徒、会長…だど？」

生徒会長。生徒会長とは、中等教育の課程（中学校の課程、高等学校の課程など）における生徒会の代表者のことである。生徒会長の呼称は、多くの生徒会で使用されており、生徒会長以外の呼称としては、執行委員会委員長（執行委員長）、中央委員会委員長（中央委員長）などがある。（Wikipedia参照）

き、キタ——（。▽。）——！！

生徒会長です！俺様、ドS、ツンデレ、ナルシ、ワンコ…どんな性格でも美味しくいただける魔法の役職、生徒会長です！
ほわっ！ヒヤッホー！！！！

「篠実君、さあ入ろうどんどん入ろう超入ろう！！！」

「は？何テンションあがってんの？さくら、気持ち悪い。」

「なんとでも言え！私は生徒会長に会った！！」

「：さくら、生徒会長のこと好きだっけ？」

「生徒会長という役職が好きだ！」

「……意味分かんない。」

篠実君の呆れた溜息。けど、生徒会長という人に会うまで私のテンションは下がらないよ！なんたって私は生徒会長（という役職）が好きなのだから！

「うるっさい！生徒会室の前でギャーギャー騒ぐとは、良い度胸じゃねえか！！」

「あわわっ！」

両開きタイプの生徒会室のドアが爆音を上げて開く。そして怒鳴り声。邪魔して申し訳ないが限度というものが：

「は、」

「テメェらもそこで正座してろ！！」

黒髪紅の瞳のイケメン……。どストライクだ、ぜ……。

と、いうわけで、生徒会室で正座をさせられています。けど先客がいました。お名前は会津あいつ描介君かきすけというらしい。なんでも校外で暴力沙汰を起こしたらしいぜ。そして生徒会長さん（さっきのどストライクイケメン様）に怒られていたらしい。でもイケメンです。この学園イケメン率高え。

「なんだよ。さっきからジロジロ。」
「え?!」

会津君は怒っているようだ…。まあ、ジロジロ見てるほうが悪いんですけど。そんな対不良戦ラーウンドワーン!ファイ!!みたいな顔しなくても…。そんなこと面と向かって言えないんだけどね。ええと、なんか、なんか話題―…

「あ、えと、素敵なヘアバンですね。」
「はあ?」

青紫色のヘアバンドの奥の黄金の瞳が揺れた。あ、この人良く見れば髪の毛が猫耳っぽいかも…。かわゆい…。

「…そんなこと、面と向かって初対面の奴に言うか?普通…。それも、俺みたいな奴に。」

「でも…似合ってるよ…。その、髪の毛、モフモフしたいです…。」
「…お前、変な奴だな。」

「あは、よく言われま―す。」

描介君かつこかあい…。不良キャラに萌える日がくるとは…!!

「廉太郎^{れんたろう}、言っていた二人は来ている…ようだな。」

「勇斗!もしかして、この二人がお前に啖呵切ったっていう奴か…。」

あ!青の風紀委員さんだ!鋭い瞳に射抜かれてどつきどきだぜ!と、いうか、啖呵…?き、切った覚えねえっす…!!

「佐藤さくら：遅刻とちよつとした制服違反が積み重なっている。

井原篠実：毎日のように遅刻そしてネクタイはほとんどしていない。これだけ聞けば、自分の罪はわかるだろう？」

「嚴重注意ってことでいいんじゃないですか？」

「井原、お前は少し黙れ。」

「篠実君…、君って奴は…。」

「聞けば、授業態度もあまり良くないようだな。よって、お前達、と、おい！会津描介！お前もだ！お前らは無期限の生徒会預かりとする！！」

風紀委員さんはドーン！とでも効果音がつきそうなくらいの態度で私達に言い放つ。さすがの私も、篠実君もキョトンとしてしまった。会津君は眉間に皺をグッと寄せたけどね。

それにしても無期限の生徒会預かりってwktkしますね。

佐藤 さくら様 オープニングその4です。 (後書き)

《キャラクタープロフィール》

蓮実 廉太郎

はすみ れんたろう

年齢…18歳

役職…ローザ学園高等部3年 生徒会長

キャラクタータイプ…俺様 ツンデレ

イメージカラー…赤

佐藤 さくら様

彼らの素顔はいかがでしょう？

ピリリリリ

「!!」

私のポケットの中で携帯が鳴った。可笑しいな…マナーにしてたはずなのに…。

アレックスさんに貰った真っ白な携帯電話。虹色にライトの色を変えながら鳴っている。

「おい。」

生徒会長さんが不機嫌そうに私の手の中にある携帯に手をのばす。そしてすんなり私の手の中から携帯を取り上げ、私の許可なく通話ボタンを押した。

「これで満足か？アレックス。」

「え？」

生徒会長さんは何と言った？……アレックスさんを知っている、っぽい？

そういえば、この世界はアレックスさんの作った世界だって言ってたわけ？…じゃあ、皆私の願望を知ってるのか！！あばばば恥ずかしいぞこれは。

頭の中で百面相をしていると会話が終わったのか生徒会長さんは携帯をパチンと閉めた。

「あの…。」

「プロローグは終了。」

「へ？プロローグ？」

不機嫌顔の生徒会長さんは私を視界に入れる事無く篠実君や風紀委員さんや会津君に向けて言う。まさに私はアウトオブ眼中、である。

「はあー…やっと終わったのか…。」

「会津、お前は一言二言話したくらいだろうが。疲労感ならどう考えても井原の方がある。」

「自分は別になんとも。演技は慣れてるんで。」

会津君、風紀委員さん、篠実君、と口々に言う。

その3人に気を取られていると背後で扉の開く音がした。

「れーんたろーくうん、そろそろお話終わったんとちゃ、う…あれ？まだやった？」

「だ、ダメですよ、松原さん…入っちゃ…。」

「ええやん、ええやん。かったいなあ、武留は。なあ、さっさと打ち上げでもいこーやあ。」

「松原殿、河本、もういい。終わってる入っていい。」

再登場ですね。お2人とも…。2人も知り合いつぱいし、やっぱりみんな顔見知りなんです。そうなんです。

彼らも私の願望を知っているんだとしたら…すぐくツボを突いてくれていたんだが…。

「あはは。えらい混乱した顔やねえ。」

「え、あ、松原、君。」

ニコニコと笑ったままの松原君。1年君はおどおどとした態度で私を見ている。

「廉太郎君、もう言ってええんとちゃう？」

「ええ、分かってます。」

「でも、まだ霧人さんが来てないけど。」

「井原あ、お前それくらい勘弁してやれよ。あん人は可哀想だ。」

「会津の言うとおりだ。井原、あの人が失うものは大きい。」

「あ、のお……。」

一斉にみんなの瞳が私に向けられる。その迫力は、凄まじい。ちょっとダメージを食らった。

でも、みんなここになんで集まったんだろうか。私のための説明会かなにか？

けど霧人君が可哀想とはなんぞや。

「……佐藤さくら。」

「は、はい！」

生徒会長さんが私の名前を呼ぶ。

怒った声。さっきの怒鳴り声みたないのじゃなくって、本当に静かに怒ってる。

他の人もピリピリとした空気を醸してるし…一体なんだっていうんだ…。

「君は本当に面倒なことをしてくれた。」

「え？」

「それにも気付いとらせんみたいやなあ。まあ、当たり前なんやけど。」

「少佐…。」

「はいはい。年配もんは静かんしとくわ。」

少佐、少佐？生徒会長さんは松原君を少佐と呼んだ。このご時世に少佐って。あだ名？

それに松原君のほうが年下なのに生徒会長さんは松原君に対して敬語で松原君は生徒会長さんに対してため口。アレックスさんにより順位付けかなにかでもあるのかねえ？

「俺達は、君に連れてこられた。」

私が連れてきた？意味が分からないよ。生徒会長さん。だって私はアレックスさんに連れてこられたんだもん。

佐藤 さくら様 ルールを学んでいただきます。

「意味の分かっていない顔だ。もう少し噛み砕いてやったらどうだ。」

「向島…、なら貴公が説明すればどうだ？俺は本当は話すのも面倒なんだ。」

「つれてこられた回数は貴様のほうが上だ。貴様のほうが理解できている筈、なのだが？」

「まーまー、ケンカは後にしようぜ？向島殿に、蓮見殿よお。」

「「人斬りは黙っている！」」

「あん?!」

「若もんは血の気が多くてあかんなあ…。廉太郎君ももう少し落ち着き持ったほうがええっちゅーのに。」

「そんなこと言ってないで止めてくださいよー！松原さん！」

「無理やって。俺、そういうん苦手やもん。井原君がやったらええんとちゃう？」

「自分は姫の命令しか聞かない。」

「お堅いやっちゃなー。でも、その高い忠誠心は認めたるわ。」

また私を抜きにしてお話をしだした…。わたしはそんなに影が薄いのか!!

んで、意味不明な言葉も多数！『人斬り』、『姫の命令』、なんだそれ。

思った…んだけど、この空気ですら流石の私も発言する勇氣は無い。じつとその様子を見ると、篠実君と目が合った。

「……。」

「え…つと…。」

感情の無い瞳。さっきまでの毒舌は私に向けられず、ただただ、無言でこちらを見ている。

「いーはら君。あんま見たんなや。」

「…でも…。」

「まあ、気持ちは分かんんでもないわ。守るべきもんをこの子に奪われたんは俺も同じやし。…まあ、まず説明は必要やし…、そんな床に座らんとこっちの椅子に座りいな。」

「はあ…。」

松原君に言われたとおり、私はソファに座る。松原君も私の目の前に座る。そしてゆっくりとした動作で足を組む。

どっしりと構えるその姿はなんだか貫禄があるように感じる。わ、私と同じ年…だよな？

「ほんまは、1番経験のある廉太郎君に話してもらうんが1番ええんやけど…、向島君と会津君と忙しいみたいやし、俺が答えたるわ。なんが知りたい？」

「もう、なにから何まで…。」

「へえ。意外と知識欲はあるんやなあ。」

松原君はくすくすと笑う。その顔は少し嫌味っぽかったけど…、やっぱイケメンだ。少し松原君のイメージとは違う笑い方だけど。笑いながら松原君は「そうやなあ…」と呟いた。

やっと本題に入れる。私には知りたいことが山ほどある。なんで生徒会長さんがアレックスさんを知っているのか、とか…私が連れてきた、ということになっているのかとか…本当に、たくさん。

「まず、この世界の説明やなあ。」

「あ、それはアレックスさんから・・・。」

「アイツの言うこと、全部都合のエエ事だけやし。黙って聞いとってほしいわ。」

「う、あゝは、い。」

松原君の雰囲気が変わる。

柔らかい雰囲気から、鋭い、有無を言わせないような：雰囲気。

「君が聞いとるんは大方、自分と俺らが恋愛をする世界、っちゅーことくらいやな。でも、俺らはちゃう。ある取引をむりやりさせられて、身体と精神の支配権をアレックスに取られとる。」

「ある、取引？」

「そや。大方の相場が自分の命やな。」

「い、命?!」

「自分の命：寿命を延命させる代価に、アレックスの命令をアレックスが満足するまで答え続けること。」

「そーや。井原君の言うとおり、俺らは自らの命欲しさにその他をアレックスに捧げた、アレックスのお人形さんや。」

篠実君の言葉を肯定した松原君は足を組みかけて、私を睨む。私に向けられた威圧感はそのまま。

「そんで、俺らは君との恋愛を強制されてそれぞれの世界から異世界に居る。」

その言葉に、私は絶句した。

私が、思っていたのとは全然違う。

自然と私が彼らを好きになって、自然と彼らも私を好きなるのだと思っていた。

けれど、それは逆で、自分の意志ではなくてアレックスさんの意志

でここに居る、ということ…。
全く望んでいないルールが私の居ないところで結ばれている。

「そんでや。このゲームの結末は、君が俺らの中の誰かと結ばれること、やなあ。簡単に言うと。」

「それも…アレックスさんから…。」

「あ、そ。」

「少佐…。」

「ああ、廉太郎君。落ち着いたか。」

「はい。お手数取らせました。続きは私が…。」

「おん。なら頼むわあ。やっぱ、俺こういうん向いてへんのよ。」

松原君は生徒会長さんへ説明役を託した。
紅色の瞳がこちらに向けられる。

「この世界には、決まり事がある。」

松原君の横に腰掛けながら、生徒会長さんは呟いた。背後では風紀委員さんと描介君が懷に落ちないような顔で黙って生徒会長さんを見ている。

けれど、すぐに生徒会長さんのほうへ視線を戻した。

「1つは、少佐の説明通りにお前と恋愛をしなければならないこと。
2つは、お前の好意の言葉に俺達は縛られるということ。3つは…
お前に選ばれた奴は、一生元の世界には帰ることが出来ないということ…。」

「え…?」

耳を疑った。特に、3つ目。2つ目も気になるが、特に3つ目だ。
元の世界に帰れない…?

「それって…？」

「言葉のままの意味だ。お前が一生の愛を手に入れると同時に、俺達は一生の自由を奪われる。」

「じゃあ、じゃあ…せっかく寿命が延びても、」

「お前に愛された時点で終わり、というわけだな。」

「そんな…。」

聞いてない。私のせいでこんな事になってるなんて…。
こんなの、間違ってるよ…。

「なんだよ、テメエ、自分のせいだって分かってなかったのかよ。」

拙介君の声が静かな生徒会室に響いた。

「ふざけんなよ…。俺はテメエのために生きたわけじゃない！何も知らなかった、で許されると思ってんのか？」

「そんな事…！」

「そういう顔、してた…。」

篠実君がポツリと呟いた。

「た、確かに、私は知らないことだよ…、けど…、全く関係ないとは…。」

「責任は、感じてるのか？」

風紀委員さんが眉間に皺を寄せて言った。

私はゆっくりと頷く。

だって、私のせいで皆はここに居る…私が連れてきてしまったんだから。

「じゃあ、貴様は誰も愛すな。」

「誰も愛すな…?」

「好き、愛してる類の言葉も禁句。その言葉が俺達を縛ることになる。それは先程俺が言ったな?」

「そして最後の日まで誰も選ばない、ということだ。」

「誰も?それじゃあ、アレックスさんのルールには…。」

「貴様が誰も選ばない、ということは…貴様がルールを破ったことになる。罰を受けるのは貴様だけになる。貴様だけが、この世界に取り残される。」

「え。」

「テメエ1人の犠牲で俺達の一回分の自由は守られるってことだよ!そんならい分かれよ。」

私、1人の犠牲で皆が助かる?

そんなの、そんなの…酷すぎる。私だけ、助からないなんて。

「そんなの、無理に決まってるよ!」

「へえ?そんなこと、許されると思っているのか。」

「私だけ犠牲になれ、だなんて!」

こんな所にいられない、こんな人達なんて好きなることなんて出来ないよ!

佐藤 さくら様

彼の話を聞いてみませんか？

生徒会室から、私は荷物も持たずに自宅に逃げ帰った。お母さんは驚いた顔をしていたけど、今はそんなの気にしている場合じゃない。今、口を開けば、余計なことばかりを母さんにぶつけてしまいそう。

「さくら？」

ドアの向こうで声がした。……霧人君の声だ。お母さんが呼んだのかな？

分からないけれど、霧人君の声は大分戸惑いを含んでいる。

「開けるよ？さくら。」

がちやり、と音を立ててドアは開いた。

今朝と相変わらず綺麗な顔の霧人君が心配そうな顔をしていた。

どうせ、霧人君もあの人達と同じなんだ。ただ、演技をしているだけなんだ。

アレックスさんの命令で。

「…篠実君達と、色々話したんだよね。」

「……。」

「色々…酷なことを言われただろう。」

「…だったら、だったらなんだよ！き、霧人君だって、同じなんですよ！？」

「…否定はしない…かな。」

霧人君は辛そうに笑みを浮かべた。その顔に、私の中の良心が少しだけ疼いた。けれど、この人達を私を犠牲にしようとしているんだ。

騙されちゃ駄目だ。駄目なんだよ。

「でも、彼らも悪い人達ではないんだよ。色々…理由があって…。」

「理由があれば、人を犠牲にしてもいいの?!じゃあ、私は霧人君を犠牲にして帰ろうか?!それでいいの?!」

「いいよ。」

「え…。」

霧人君は微笑んだ。肯定の言葉付きで。それに驚いた私は、さっきまでの昂っていた気持ちたちが落ち着いてしまっていた。

「俺の犠牲で、さくらさんが助かりたいというのなら…。」

「それ、それ、嘘だ!」

「嘘じゃない。」

「嘘だよ!」

「落ち着いて…さくらさん。」

「!」

霧人君に抱きしめられる。霧人君の服が至近距離で見える。霧人君の匂いがとても落ち着く…。

「蓮実君と、松原さんはね、軍人さんなんだ。俺が生きた時代より少し未来で起こる戦で、命がけで戦っているんだって。この日本を…この国の民を、命がけで守っているんだって。だから、早く帰って沢山の人を守らなければいけないんだよ。」

「向島君は俺よりも昔の時代の人。まだ藩が存在していた時、だったかな？長州藩士の向島君は、新しい世を作るために、奔走しているんだって。だから、早く帰ってたくさん準備をしなければいけないんだ。」

「河本君は廻船問屋の息子さん。向島君のいた時代ではその大旦那さんになっててね、長州を助けるために：頑張っているんだって。だから、早く帰って立派な店にしなければいけないんだよ。」

「篠実君はね、向島君と河本君よりもずっと昔の時代：戦乱の世が続く時代の人。豊太閤のまだ名を馳せていなかった、それくらい昔そんな世の中で1人のお姫様を守っているんだって。だから、早く帰ってお姫様を安心させて守ってあげなければいけないんだよ。」

「会津君は、向島君と同じ時代の人。会津君は沢山の人を：悪い人を斬って、斬って、大切な人のため世の中を良くしようとしてたんだって。だから、早く帰ってその大切な人のためにまだ頑張らないといけないんだ。」

霧人君はそこまで言うのと私の身体を離してニコリと微笑を浮かべた。それは、どこか安心する笑顔。やっぱり霧人君は少し不思議だなあ……。

でも、まだ霧人君の理由を聞いてない。

彼は、何故私に選ばれても良いなんて言い出したのか。他の人達は私にも想像できないくらいすごい人生を送っているようだし……霧人君もそうなのかな？

「あの、霧人君……」

「俺の、理由……だよね？」

「あ、うん。」

「俺はね……大正の作家だよ。」

「作家……」

他の人達と比べてすごく平和そうな職業だった。けれど、霧人君からはそういう雰囲気を感じる。

霧人君からは、他の人達にはない空気の柔らかさがある。蓮実さんや向島さんはギスギスとしてとても鋭い空気。

「沢山の話を書いたよ。中にはとても売れた物もある。けれど、本にはその作家の思想がある。俺の思いは、ある人の思いに刃を向けてしまったみたいで……俺は、殺された。」

「ころ、された？」

「うん。暗がりの路地でね。後ろからぐさり、と……胸の中心を刺された。」

鎖骨の少ししたを右手で撫でながら悲しそうな顔をする霧人君。

「でも、まだ俺は死ねなかった。でも命の灯はもう消えかけている。そこで、アレックスに出会って、生かしてもらった。」

「アレックスさん…。」

「そう…。俺には、まだ大事な人がいるから。」

「大事な人？」

「うん。俺の妻と、子供。」

「は…。」

霧人君は微笑んでいた。

霧人君、それって…家族…っていうことだね？駄目だよ。私、霧人君の家族を犠牲にしてまで霧人君を奪えない。

「大丈夫。さくらさん、俺を選んでもいいんだよ。」

霧人君が私の気持ちを分かっているかのように言った。相変わらず霧人君は優しく笑んでいる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4392t/>

恋愛ゲーム

2011年10月9日02時54分発行